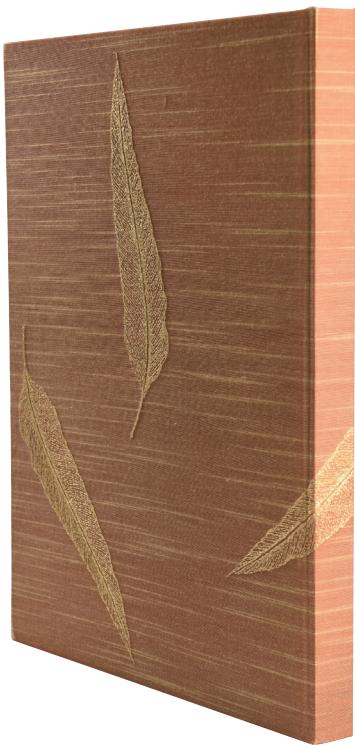


# 超豪華本 金糸に透かしの



布張りに  
金糸の刺しゅうを  
入れた表紙  
=山崎一輝撮影

ル | 晴  
デ | レ



絵師、東學さん(55)の墨画集「天妖」の制作は、まだまだ越えなければならない峠があった。

表紙は布張りで、學さんが描いた羽根の絵を図案化して金糸で刺しゅうした。學さんと、プリンティングディレクターを務めたマリさん(築山万里子さん)とで、何種類もの中から糸を選び、布に刺しゅうを施す位置を製本会社に指示。その布を表紙に貼り込んだら……刺しゅうの糸の穴から、のりがにじみ出てきたのだ。これはいかんと、布の裏にさらに1枚、紙を裏打ちすることに。それも全て手作業で。こういう予期せぬ事態に対応するのが、アサヒ精版印刷の真骨頂と言おうか……。

活字はすべて活版印刷。1文字1文字、活字を組んで版を作る。いま主流のオフセット印刷は、刷版に付いたインクを紙に転写するのだが、活版は活字に付けたインクを紙に押しつける。インクを乗せるという感じで、だから手触りや匂いやにじみがあって、独特の味わいが出る。だが、今や活版印刷を手掛けける工場自体が少ないうえに、大阪には活字を組む組版ができるところがほとんどなく、東京の印刷工場に依頼した。人の手で活字を組むので、アルファベットが横を向いてたこともあった。

そして絵の印刷。通常、カラー印刷はシアン(青色)、マゼンタ(ピンク)、イエロー、ブラックの4色を基調に表現する。しかし、學さんの墨画は黒が命。そのため、普通はしないという「墨基調」、つまり「黒のインクのパーセンテージを多くして、より黒い黒を出せるように」(マリさん)したのだ。

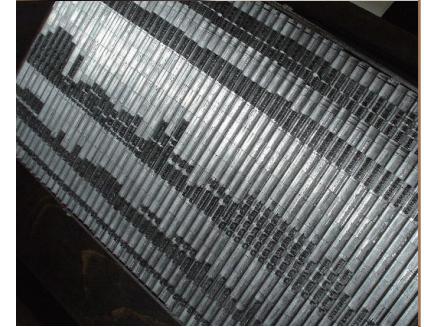
色の出具合をチェックするため、いつもは刷り出しだけ立ち会うマリさんが、50枚の作品全ての刷り上がりまで立ち会った。合紙という、とっておきの技を使って作った特製和紙の効果は抜群で、「墨の食いつきが良くて、それはそれは美しく仕上がったんですね」とマリさん。學さんは「僕がちっちゃい絵、描いたみたい」と喜んだ。

こうして、500部限定で1冊5万9850円の豪華本「天妖」が完成した。値段も高いが、とにかく重い!

「思ったよりすごいのができた。これ作ったらもうええか、くらいの。マリコが鬼ほど頑張ったからできただんですよ」と學さんは振り返る。隅々まで気が行き届いた「天妖」は、2007年の出版から10年以上を経てもなお、輝きを放っている。

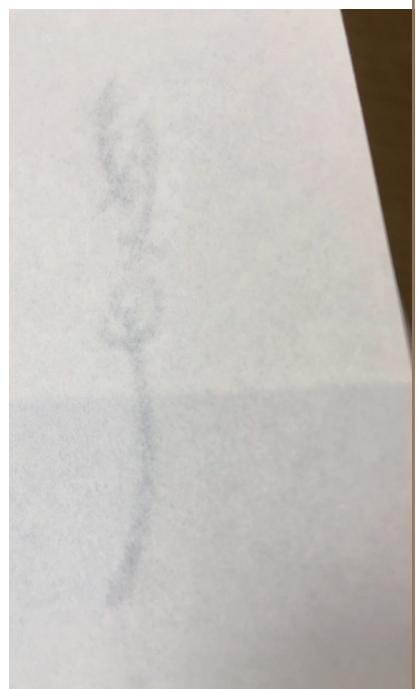
画集の中の女たちは、時に肌をあらわにし、ぞくりとするような色気を放つ。正気で描ける絵とは思えない。そもそも、こんな絵を描く東學とは何者か?

薄紙には活版印刷でタイトルも入っている  
=川平愛撮影



活字を組み合わせた活版印刷の組版  
=アサヒ精版印刷提供

文・松井宏員 — デザイン・シマダタモツ



東學さんのサインが透かして入っている薄紙  
=松井宏員撮影